
寄り道図書館

アイス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

寄り道図書館

【Nコード】

N5958V

【作者名】

アイス

【あらすじ】

これは、私が中学生の頃の不思議な話である。
図書委員長だった私はいつもどおり図書室を開けて準備を済ませ、
昼休みが来るのを待っていた。その間に、私は不思議な体験をすることになる。

(前書き)

初の怪談もの(のつもり)ですww

これは、私が中学生の頃に出会った不思議な出来事である。

中学二年の秋から冬にかけて図書委員長を務めていた私は、給食の後に一足早く図書室に向かって鍵を開けに行くのがすっかり日課となっていた。

何故図書委員長になったのか、正直なところ分らない。特別リーダーシップを張れるタイプじゃないし、第一委員長なんて成績目当ての奴以外には面倒臭いものでしかない。

だが私は自ら立候補した。特別な理由はなかった。本と図書室、それと優しくて人懐っこい司書の先生が大好きで、委員長になれば図書室と関わる機会が増えるかなと思っただけのことだ。事実、昼休みに図書室を解放するのは委員長である私の役目になった。

その日も、私はいつも通り給食を早々に済ませて職員室で鍵をもらい、扉を開けに図書室に向かった。横開きの扉を引くガラガラという音と共に図書室が解放される。もちろん誰もいない図書室は閑散としていて心地良い。今思えば、誰もいない図書室をほんの少しの間だけでも独占したかったのかもしれない。

カウンターの引き出しを開き、生徒達の貸出カードを整理する。卓上の日めくりカレンダーを捲って今日の日付にし、カウンターを布巾で拭いた。そして最後に図書室の入り口に掛かった表札を『閉館』から『開館』にひっくり返す。

準備が整ったら、後は人が来るのを待つだけだ。

私はその間、この図書室をぼんやり眺めていることが好きだった。読んでいる本のことを考えたり、脳内で空想を作って楽しんだり、何か読みたくなったら図書室内の本を探索する。別に人がいたって出来ることだが、図書室を独り占めに行っていると倍に楽しめる。

そう、全てがいつも通りのはずだった。

ガラガラと戸を開く音がした。

あれ、まだ昼休みになつてないはずだけど………………。
カウンターのの上に置いてある時計を見ると、昼休みまでにはまだ二十分もある。

誰だろう？ こんな早くに。

私は時計から目を外し、扉の方を見た。そして絶句した。
図書室に訪れたのは生徒でも先生でもない。

無数の黒い影だった。

しかも、形は定まつておらず影としか言い様のないそれらは、次々と扉をすり抜けているのだ。それらがすり抜ける度に、開いてもないのに扉からガラガラという音だけが響く。何とも奇妙な光景だった。

えっと……………

夢でも見てんのかな、私。白昼夢つてやつ？

頬をつねるのは痛そうで嫌なので、頬をぺちぺちと軽く叩いてみた。感触がある。どうやら夢ではない……………のかな？

私がそんなことをしている間に、影たちは図書室内に散らばり、いつの間にか人の形を成していた。とはいってもやつぱり黒いままなので、影には変わりない。

影たちは特に何をするわけでもなく、図書室の本棚を順番に見まわったりする者、本棚から本を取り出して立ち読みする者、椅子に座って読む者など、やっていることは皆ごく普通の人間と変わりなかった。それが返って奇妙だった。

まあ、害は無さそう、かな。

私はよく分からなかったし、未だに夢か現かも定かではなかったが、とりあえず傍観を続けることにした。誰かを呼んだところでどうにもならないと思うし。

それにしても、何でこんなことが起こったんだろう。

夢なら何でもありだろうけど、これがもし現実だとしたら、何故こんな現象が起こっているのか分からない。

そもそも、あの影たちって何なのかな。

幽霊？ 妖怪？ それとも別の何か？

てゆうか、こんな何の変哲もない学校の図書室に一体何の用があるのだろうか。

あれこれ考えながらぼんやりと眺めていると、ふいに影たちの一人が本を片手にこちらに近づいてきた。思わず少し身構える。

「お願いします」

……………んん？

私は耳を疑った。私は声を出していないし、私以外に声を出す人だっていないはず。

「あの、本を借りたいんですけど」

すっかり固まっている私に再び声が掛かった。どうやら、今日の前にいる影から出た声らしい。何となくだけど困っているような仕草っぽいし。

それにしても、この影は男なんだろうか。声は何となく男って感じだけど。ていうかそもそも性別なんてあるのか？ まあ、どうでもいいか。

「あ、はい。学年とクラスと出席番号を教えてください」

私は反射的にカウンターの引き出しを開いてそう問い掛けていた。そこでハッと気が付き、貸出カードへと伸ばす手を止めた。

ちよつと待った私、こんな全身真っ黒が生徒のわけないだろ。

「あの、すみません。ここは学校の図書室だから、この本はこの生徒と先生しか借りられないんです」

影に向かって真面目に喋る私って一体……………。目の前にいるのが影だと、それに対応する自分の行動まで奇妙なものに感じてくる。

「大丈夫です。昼休みが始まるまでには返します。ちゃんと、すぐ返しますから」

深々と頭を下げる影。違和感だらけでもう何が何だか分からず、私

は思わず「はい」と返事を返していた。

「ありがとうございます」

影はまた深々と頭を下げ、手にしている本を差し出してきた。幸田詩緒の『名無しの劇場』という本らしい。ふと、今度私も読んでみようかなって思った。

借りるとは言っても貸出カードは無いので、とりあえず著者名と題名、出版社名と本の品番をメモした。昼休みまでに返すとは言うているが、形の定かでない影だ。本を持ってそのまま消えてしまうかもしれない。もしものためにメモはしておくべきだと思った。

「昼休みまで、残り十分しかありませんけど……」

「充分です。ありがとうございます」

影は私から本を受け取ると、嬉しそうに歩いていき、扉をすり抜けて消えていった。

その際にゴン、と音がした。

何かと違ってカウンターを出て出入り口まで歩み寄る。そして扉の前に落ちているものを見て思わず「あっ」と声を上げた。

たった今影に手渡したばかりの、幸田詩緒の『名無しの劇場』だった。

私は屈み込み、そっと本を手に取った。ちゃんと本の感触があった。真正正銘の本物だ。

何だっただんだろう、一体。

立ち上がって後ろを振り返ってみる。あれだけいた無数の影たちは、いつの間にかいなくなっていた。今図書室にいるのは、私一人。

やっぱり訳が分からなかったし奇妙だけど、何でだろう。嫌な感じはしない。

それどころか、ほんの一瞬だけどまた会いたくなって思った。

何となく微笑ましい気分になりながら、影がたつた今借りて退室すると同時に返した本を戻しに行った。

それからおよそ五分後、ガラガラと扉を引く音がした。今週の当番である図書委員がやってきたのだ。彼らがカウンターに付いて数秒後にまたガラガラと音がして、最初の生徒が入ってきた。徐々に生徒の数が増え、先生なんかも二人入ってきた。生徒の中にはたむろするだけが目的の人達もいて、あんなに静かだった図書室が賑やかになっていく。

ああ、平和だなんて思った。

その日以来、私が影たちを見かけることは一度も無かった。

それでもあの出来事は、今でも私の中に大切な思い出として優しく残っている。

(後書き)

ご意見とご感想、お待ちしておりますww

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5958v/>

寄り道図書館

2011年8月8日03時29分発行